

説教 『真ん中にイエスの祈りが』 山本 護牧師
聖書 イザヤ書 55:10～11／マタイによる福音書 18:19～20

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである(マタイ 18:20)」。よく知られたイエスの御言葉。2～3人の群でもこれが教会の本質、ということか。その直前には「あなたがたのうち二人が地上で心をつにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる(18:19)」というイエスの約束がある。幾人もいる中の「二人が心をつにするなら」ということだ。えっ、ドキリ。だとすると「二人または三人が集まる」ことも、教会の規模に係わらず、その時、その場に、集まって祈る少数の者ということだろう。省みると、伝道所内で折々に集まって心をつに祈っているか、牧師としてその備えを怠っていないだろうか、と胸を突かれた。

腰を落とし、さらに御言葉を噛みしめよう。「わたしの天の父がそれをかなえてくださる(18:19)」。「わたしもその中にいるのである(18:20)」。少数の者が心をつにし(18:19)、御名によって集まる場(18:20)には、御子なるイエスがおられ、父なる神の力がそこに働く。イメージが膨らみ、地と天が結びつく。集まって私たちが祈るよりも前に、イエスがここで先に祈っておられる姿が想像される。そうなのだ、イエスはただ漠然とおられるのではない。2～3人の私たちと共にイエスが祈っておられる。だからこそ、「どんな願い事であれ～天の父(イエスの)はそれをかなえてくださる(18:19)」のである。

教会にまず必要なのは、構成員の意見が整う以前の、少数者の祈り。これまでの八ヶ岳伝道所と、分区や教区とのやりとりが思い起こされる。この伝道所は、少数で祈る者としてのかけがえのない経験をし、やがて諸教会が私たちを受け入れて、全体で調和する響きとなった。私たちは折々に少数者となり、折々に多数者となるだろう。ただ、どのような立場でいるにせよ、多数なる人間の力ではなく、少数の祈りに応じてくださる神の恵みこそを信頼したい。そこでこそ、イエスが祈っておられる姿に出会える(18:20)。私たちは祈る。二人または三人の少数で祈り、また独りで祈る(6:6)。

「雨も雪も、ひとたび天から降れば、むなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える(イザヤ 55:10)」。自然の隅々で神の恵みは働き、世はダイナミックに生成変化している。神の使命を負う教会において、それはいっそう具体的に、教会の現実となる。「そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす(55:11)」。

「わたし(神)の口から出るわたしの言葉」は、何よりも先に「二人または三人がわたし(イエス)の名によって集まるところ(マタイ 18:20)」に現れる。その小さな集まりの真ん中でイエスが祈っておられる。イエスの祈りは少数者の祈りとなり、教会全体の祈りになり、やがて世の祈りとなって「むなしく神のもとには戻らない(イザヤ 55:11)」。必ずや荒廃した「大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせる(55:10)」。そのために「種蒔く人には種を与え(55:10)」、「わたし(神)が与えた使命を必ず果たす(55:11)」。八ヶ岳伝道所はその使命を負う「二人または三人(マタイ 18:20)」。ゆえに、イエスの祈りを最初に聴く者である。



【おまけのひとこと】

淀んだ本流が源流をつくるのではない 潤された大地(イザヤ 55:10)の一滴々々が清冽な源流となる 鉄砲水のような恵みも稀にあるが 透明度の高いキリストの流れは 二人または三人の源流から